

「きく」ことに関する現象学的知見の比較検討

—教育研究への展開の意義—

A comparison of phenomenological findings on Hearing and Listening and the signification of expansion into pedagogical studies

神 林 哲 平

Tepei KAMBAYASHI

目 次

- I 問題の背景と目的
- II 方法
- III 諸文献の概観と比較検討
- IV 教育をめぐるきくことの豊かさへ

I 問題の背景と目的

「きく (=聞く・聴く)」ことは、本来豊かな事象でありながらも、その複雑さゆえに単純化、合理化されたり、一面的に捉えられたりせざるをえなかった。例えば、知覚の文脈では「見る (視覚)・聴く (聴覚)・嗅ぐ (嗅覚)・味わう (味覚)・触る (触覚)」のうちの一角を占め、その対象は外界に実在する多種多様な音である。ここにはもちろん、人間の音声言語も含まれるが、基本的には想像による非実在的な音は前提とされていない。また、この文脈では視覚が優遇されてきたため、それに比して聴覚はないがしろにされてきた経緯がある。一方、言語コミュニケーションの文脈では「話す・聞く・書く・読む」のうちの1領域であり、発達段階上、最も始原的である。その対象は音声言語に限られてしまうものの、物理的には非実在的な音である内言などの自己内対話も含まれる。アウトプットである話すことに比べると、インプットである聞くことは捉えにくく、研究でも後塵を拝している。教育をめぐるきくことの研究においても、前者の文脈では音楽教育や環境教育、後者の文脈では国語教育や教育相談、教育談話などの分野によって分断して捉えられてきた。

きくことの本来的な豊かさをすくいとるためには、例示したような知覚かコミュニケーションかといった文脈によって分断することなく、出発点として包括的にきくことを捉え直す必要がある。その目的に対して妥当なアプローチが、現象学であると考えられる。というのも、現象学は「一切の個別的経験の

普遍的基盤として、経験の世界として、一切の論理行為以前に直接にまえもってあたえられるような世界」(フッサール, 1975, p.33)と定式化される「生活世界」を出発点とするためである。物理的に実在し、聴覚によって知覚される音でも、非実在的な想像による音でも、音声言語であっても、生活世界においては「自分に立ち現れたきく経験」として、疑い得ない現象である。こうした包括的な視点である「現象学的きくこと」(神林, 2018b)を端緒に、その豊かさを探究していくことが可能となるだろう。

以上を踏まえ、本研究は包括的な視点からきくことに関する現象学の諸文献を比較し、教育をめぐるきくことの本来的な豊かさを探究するために妥当な知見について検討することを目的とする。

II 方法

本研究では、「共通的分析枠組みを用いて属性の異なる2つ以上の対象を対照し、記述し、分析する研究手法である」(久野, 2014, p.86)比較的アプローチを用いて検討する。対象となるのはきくことをモチーフとした現象学の文献であるが、それらは視覚や話すことを主題とした文献と比較して、それほど多くない。本研究では、デリダ『声と現象』(1967=2005)、アイディ『聴くことと声：音の諸現象学』(1976=2007)、デュフレンヌ『眼と耳：見えるものと聞こえるものの現象学』(1991=1995)、鷲田『聴くことの力：臨床哲学試論』(1999=2015)、森『〈実践=教育思想〉の構築：「話すこと・聞くこと」教育の現象学』(2011)の5点を取り上げる。

これらの諸文献について、まず、「研究動機や意図、目的、問題提起」、「アプローチ（言及している現象学者）」、「きく対象の射程」といった共通の分析枠組みから概観し、それぞれをコーディングする。コーディングしたものは、【 】で表記した。次に、それぞれを比較し、きくことについてより包括性の高い現象学的知見について検討していく。最後に、その検討された文献と教育をめぐるきくこととの関連について、展望を示す。

Ⅲ 諸文献の概観と比較検討

(1) 研究動機や意図、目的、問題提起

デリダ（2005）は、現象学を創設したフッサールの初期の著作である『論理学研究』を対象にし、「記号」が「表現」と「指標」という二重の意味を有することに触れる。そして、こうした区別をどのように受け取り、読み取ればいいのかということに思いを巡らせ、次のような問いを掲げる。

われわれの問いの最も一般的な形式は、次のように規定される。すなわち現象学的必然性、フッサールの分析の厳密さと緻密さ、そしてその分析が応じている要請、つまりわれわれがまず第一に聞き入れなければならない要請は、それにもかかわらず、ある種の形而上学的な前提を隠しているのではないか。それは独断論的あるいは思弁的な癒着を内に秘めているのではないか。（pp.9-10）

フッサールが形而上学を超克しようと試みた現象学であったが、実のところ、その企てそのものに形而上学的な前提が内包されているのではないか、という問題提起である。そしてこの問題を解明すべく、デリダの論が展開されていくこととなる。こうしたデリダの問題提起を【現象学に内包する形而上学的前提の解明】とコーディングする。

アイディ（2007）は、言葉の中心が呼吸と音のなかにあることにふれ、音に満ちた意義の重要性をはじめに述べる。しかし一方で、実在や経験に関する思想や科学を支配してきたのが視覚主義であることについて、思想史をたどりながら詳述していく。そこから、視覚主義には還元主義的な傾向が見られるとともに、それが経験を単純化するという意味で、

経験の本来の豊かさを覆い隠してしまっていることを指摘する。そこで、次のような目的を設定し、経験の豊かさを取り戻そうと試みるのである。

……最終的な目的は、視覚そのものを聴覚そのものに置き換えるということではない。いっそう深遠な目的は、視覚と経験について自明視されているあらゆる信念にともなう現状から脱却することであり、全く異なる経験理解へと移行することであり、聴覚経験の現象学に根ざした経験理解へと移行することである。（p.15）

今までの視覚主義を聴覚主義に置き換えるだけでは、その相対的な位置づけが変わることはあっても、経験の豊かさを取り戻すことにはならない。そうではなく、視覚主義を脱中心化し、聴覚経験を含めた豊かな経験理解へと移行していこうとする志向がうかがえる。こうしたアイディの目的を【聴覚を含めた経験の豊かさの復権】とコーディングする。

デュフレンヌ（1995）は、眼と耳を中心的に取り上げ、また結びつけて論考するにあたり、「耳を正當に評価したい」（p.1）との研究動機をはじめに記述する。その理由として、反省する状況のなかでも日常的な経験のなかでも、耳ではなく眼が優遇されていることを挙げ、諸々の知見からその具体的な様相を論じていく。そうしたことを踏まえた上で、眼と耳を結びつける並列詞「と」に着目し、両者を同列に位置づける。そして、その並列詞が結合をも意味すると述べ、そこから「単に耳の名誉を回復させるばかりでなく、感官（les sens）の複数性、あるいはより正確に言うならば、諸感官に配置されているものの複数性を検討すること」（p.5）という意図を引き出している。デュフレンヌのこれらの研究動機や意図を【耳の正當な評価と複数性の検討】とコーディングする。

鷲田（2015）は、阪神・淡路大震災にまつわるエピソードやターミナル・ケアをめぐるアンケートを皮切りに、「じっと聴くこと」の力というものを感じ、論考の意図について次のように述べる。

わたしがここで考えてみたいこと、それがこの〈聴く〉という行為であり、そしてその力である。語る、論ずという、他者にはたらきかける行

為ではなく、論じる、主張するという、他者を前にしての自己表出の行為でもなく、〈聴く〉という、他者のことばを受け取る行為、受けとめる行為のもつ意味である。そしてここからが微妙なのだが、〈聴く〉という、いわば受け身のいとなみ、それについていろいろと思いをめぐらすことをとおして、〈聴く〉ことの哲学ではなく、〈聴く〉こととしての哲学の可能性について、しばらく考えつづけたいとおもうのだ。(pp.14-15)

その後、これまでの哲学が話すこと、語ることを中心に展開されてきたことを懸念する記述が見られるように、他者への能動的な言葉による働きかけではなく、他者からの言葉を受動的に受けとめる行為に価値を見いだしている。その方向性は、聴くことそのものの哲学的探究とは視角が微妙に異なり、聴くことという立場から哲学の可能性を問うというものである。このような鷺田の意図を【聴く行為の意味と聴くこととしての哲学の可能性】とコーディングする。

森(2011)は、国語科教育における一領域である「話すこと・聞くこと」の臨場性、即時性という特質に、学びが「今」を生きる学習者にとって意味のあるものであってほしいという願いを実現させる可能性を見いだす。そして、教師個々の教育思想の背景となる諸理論は、個々の解釈によりもとの理論とは異なる形で内在化されると仮定する。しかしながら、これまでの「話すこと・聞くこと」教育の理論的研究においては、それらの諸理論がそのままあてはめられていたという問題を指摘する。くわえて、国語教育学研究において、実証性以外の普遍性を見いだすための方法の開発が進んでいるとは言えないという問題も取り上げる。こうした問題の背景を踏まえ、その解決の方向性を素描しながら、「『話すこと・聞くこと』の教育思想が、授業実践／教育実践とともに構築されるものであるという立場から、これを〈実践＝教育思想〉と名付け、構築のプロセスと内実を記述すること」(p.5)を目的として設定した。この森の目的を【聞くことの特質からの学びと〈実践＝教育思想〉の構築】とコーディングする。

(2)アプローチ(言及している現象学者)

デリダ(2005)は、「現象学による形而上学批判

が形而上学的確証の内部の契機として現れてくるのを、記号の概念という特に選ばれた例について見てみるが必要となるだろう」(p.11)というように、提起した問いに対し記号の概念を例として取り上げ、解明しようとする。いわば例証的なアプローチである。記号の概念を例とするため、『論理学研究』のなかでも第一部「表現と意味」に焦点をしばり、その詳細な読解と解釈を通じて問いに迫っている。対象はあくまで「表現と意味」であるが、考察にあたっては『イデー』などのフッサールの他の文献も参照している。フッサールの言説を単純に否定するわけではなく、テキストを読み解くなかで新たな問いを生成し続けるとともに、二項対立的な概念に潜む矛盾を捉えなおし、新たな枠組みを提示するといった「脱構築」の手法がここには見られる。こうしたデリダのアプローチを【記号を例にした形而上学的企ての脱構築(フッサール)】とコーディングする。

アイディ(2007)は、「多方面で複雑かつ本質的な形で、経験を厳密に見当することに専念させてくれる」(p.17)思考スタイルである現象学によって探求を始めるとしている。そして、本質や構造や現前に関するフッサール現象学を「第一現象学」、実存や歴史や解釈に関するハイデガー現象学を「第二現象学」と位置づけ、それらの知見と照らし合わせて「現象学する(do phenomenology)」ことを目指す。その際、アイディに見られる特有のアプローチは「近似(approximation)」という概念である。この概念の明確な定義については記述されているわけではないが、次のように捉えることが可能だろう。すなわち、例えば視覚と聴覚といった2つの異なる次元を想定し、それらが相違したり比較されたりするのはどのようにしてか、それぞれの形態へとどのような仕方で分岐するのか、そしてそれらはどのように重複するのか、といったことに注意を払いながら検討することである(p.49)。このような近似によって、アイディは第一現象学から探求をはじめ、いっそう実存的な第二現象学へと移行していく戦略をとっている。このアイディのアプローチを【近似による第一現象学から第二現象学への探求(フッサール、ハイデガー)】とコーディングする。

デュフレンヌ(1995)においては、どのような方法やアプローチで主題に迫ろうとしているのか、項

目立てて直接的には明示されていない。しかしながら、耳を正当に評価するという意図に照らし合わせ、視覚と聴覚、見えるものと聞こえるものといった対比的なアプローチによって、眼と耳を同列に位置づけようとしていることが読み取れる。そして、それぞれの特質を往還しながら、最終的には共感覚といった複数のものの統一へと歩みを進めていく。論考のなかでは様々な論者の知見を援用したり批判的に検討したりしているが、とりわけメルロ＝ポンティに関する言及が随所に見られる。デュフレンヌのアプローチは【視覚と聴覚の対比的アプローチ(メルロ＝ポンティ)】とコーディングする。

鷺田(2015)は、アドルノの「非方法の方法」であるというエッセイ論に触発され、〈試み〉としてのエッセイという形式によって考えを綴っている。ここでのスタイルは「絶対的な知識や普遍的な妥当性が可能かどうかとか、『体系的な基礎づけ連関の統一』が可能か不可能かといった二者択一ではなく、その中間領域で、世界を構成するさまざまな象面のそのテクスチュアに濃やかに感応しながら、事象の襞のなかに深く分け入って思考する、そのような哲学の手法なのである」(p.48)。そして、メルロ＝ポンティやレヴィナスといった多様な哲学者や論者の言説を援用しながら、聴くこととしての臨床哲学について思考が深められる。このような鷺田のアプローチを【非方法の方法である試みとしてのエッセイ(メルロ＝ポンティ、レヴィナス)】とコーディングする。

森(2011)は、目的に迫るために調査研究、文献研究、実践研究の3視座から考察を試みている。とりわけ多くを費やしているのが文献研究であり、ここでは「『話すこと・聞くこと』の教育における思想的背景の考察として、マルティン・ブーバーの理論、エマニュエル・レヴィナスの理論、さらにはエスノメソドロジー、フェミニズム、ポストコロニアリズムにおける試みをもとに、『対話』論、『他者』論、『関係』論、『語り』論、『証言』論、『証人』論として論じる」(p.5)と概説されている。基本的には「話すこと・聞くこと」が対になって各章が展開されるが、第3章ではレヴィナスの他者論を取り入れながら「聞くこと」に焦点化した考察がなされている。森のアプローチは【他者論を中心とする思想的背景の考察(レヴィナス)】とコーディングする。

(3)きく対象の射程

デリダ(2005)が主題としていることの1つは「声」である。議論の出発点として、デリダは物理的な音響や音声ではなく、現象学的な声、すなわち「世界が存在しないときに語りつづけ、自己へと現前しつづける—自分の話を聞きつづける—そうした精神的な肉」(p.32)に定位する。フッサールがいうところの「孤独な心的生」における声である。そこに定位するのは、フッサールがロゴス(形而上学)と声(現象学的な声)との間に根源的な親和性を見いだしている、とデリダが解釈しているためである。それゆえ、非物理的な内言や想像する声から記号についての考察が進められることになる。しかしながら、デリダの主眼は、こうしたフッサールの言説を擁護することではなく、脱構築することにある。それはまた、形而上学の伝統的な音声ロゴス主義批判にもつながる。例えば、エクリチュール(書き言葉)はパロール(話し言葉)にどのように巻き込まれているのか、という問いに対して、デリダはフッサールと同じ前提にとどまりながらも、エクリチュールの先行性という帰結を引き出す。出発点としては非物理的な内言や想像する声を語る、きく、という射程であったものが、最終的には物理的な音声言語であるパロールや読む、書くといったエクリチュールにまで範囲が広がっているのである。「孤独な心的生」を出発点とするため、単純にコミュニケーションの文脈で捉えられるものではないが、「思考のための声」であると広義に解釈することは可能だろう。この文献はきくことそのものを探求しているわけではないが、声に関する深い考察を通して、現象学における形而上学的企てが解明されているのである。デリダのきく対象の射程について、【心的生を出発点とした思考のための声】とコーディングする。

アイディ(2007)は、聴覚現象のすべての範囲にわたって現象学的に探求するとしており、聴く対象については次のように記述する。

〈世界〉の諸々の声を聴くこと、想像的様態による諸々の「内なる」音を聴くことは、聴覚的諸現象の広い範囲に及ぶ。それでもなお、あらゆる音は広い意味で「諸々の声」、すなわち諸事物の声、他者たちの声、神々の声、そして私自身の声である。(p.147)

ここからは、物理的な音声言語や環境音だけでなく、内言や神々の声などの非物理的な音も射程としていることがわかる。さらには、こうしたきく対象について、その構造や形態といった聴覚経験の実存的可能性への探求から始め、音楽と言葉との関連や沈黙の地平など、最終的には音と聴取が決定的な役割を演じる人間経験の幅広い多様性へと展開していく。アイディにおいては、【物理的、非物理的なすべての聴覚現象】ときく対象の射程をコーディングする。

デュフレンヌ（1995）は、視覚と聴覚を対比させるアプローチという点で、知覚の文脈から聞くことについて考察している。きく対象としては「われわれは音を出すもの（le sonore）には、同質的な領域という性格や感覚的な生地という性格を本能的に認めず、むしろ騒音（bruits）とか音（sons）とか、さらには言葉（paroles）について語っている」（p.103）といった区分を射程とし、議論を進めていく。そうした意味では、音声言語だけではなく、物理的な環境音すべてをきく対象としていることがうかがえよう。また、沈黙や自分自身の声をきくこと、音声言語のメッセージにとどまらないイントネーションといった声の調子をも含めた論考もなされている。非物理的な音を想像してきくことについては主眼的に論じられていないが、共感覚に関する記述のところで想像の役割についても触れられている。こうしたデュフレンヌのきく対象の射程を【物理的なすべての音環境】とコーディングする。

鷺田（2015）は、言語コミュニケーションの文脈から「聴くこと」を捉えており、そうした意味では、きくことの射程は音声言語に絞られるということになる。しかしながら、主眼を置いているのはその言語的な理解ではなく、声のテクスチュア（きめ）であると読み取れる。そこには、次のような鷺田の志向がうかがえる。

哲学的思考は、個別的な対象や出来事の、その個別のかたちにとこまでもこだわりつづけるものだ。そこでは、個別的な問題が一事例としてではなしに、個別的なままにかたちをあたえられるのでなければならない。…（中略）…哲学がつねに、厳密な体系的思考をめざすと同時に、ときに断片的なことばによってしか描きだせないのも、あ

るいは問う者の息づかいや、問うその手法や、問われているその対象の肌ざわりにまでこころをくばってきたのも、おそらくはそういう理由による。（p.37）

考察されている項目をみても、声がとどくということ、間がとれない、ことばが掴む、声が響く、祈りとしての聴取、「さわる」音、といった内容が並ぶ。こうした濃やかな声のきめについて記述していくことで、ホスピタリティやケアといった概念に臨床哲学の本質を見いだしている。鷺田のきく対象の射程については、【音声言語のテクスチュア（きめ）】とコーディングする。

森（2011）は、国語科教育における「話すこと・聞くこと」についての検討に主眼を置いている。したがって、言語コミュニケーションの文脈から「聞くこと」を捉えており、その対象は音声言語である。しかしながら、言語の正確な理解を「聞くこと」の目標とすることにとどまらず、レヴィナスの他者論に依拠しながら「聞くこと」の臨場性、即時性を重視した目標について考察した。それによると、認識可能な他人ではなく、認識不可能な存在としての「他者」の方から私へと否応なしに食い込んでくるような出会いのうちに、学びが成立するという。そして、「『その場の妥当な雰囲気』に聞き従うのではなく、学習者自身さえもが妥当性を与えてしまっている、ものの見方や考え方に挑んでいく」という学びが、『聞くこと』における教育目標の重要な方向性（p.147）であると結論づけている。森のきく対象の射程は、【音声言語を聞く臨場性、即時性】とコーディングする。

(4)きくことに関する知見の比較検討

ここまで、きくことに関する現象学的知見に関する諸文献について概観してきた。それぞれのコーディングされた項目を表1にまとめ、本研究が志向する包括的な「経験の豊かさ」という点から比較検討を行っていく。

まず、「研究動機や意図、目的、問題提起」の観点について検討する。本研究の目的と照らし合わせて妥当なものは、アイディとデュフレンヌであると考える。どちらも、視覚主義の優遇を問いに付し、きくことの可能性について論じているためである。

表1 きくことに関する現象学的知見の諸文献における各観点のコーディング

文献	研究動機や意図、目的、問題提起	アプローチ (言及している現象学者)	きく対象の射程
デリダ『声と現象』	現象学に内包する形而上学的前提の解明	記号を例にした形而上学的企ての脱構築 (フッサール)	心的生を出発点とした思考のための声
アイディ『聴くことと声』	聴覚を含めた経験の豊かさの復権	近似による第一現象学から第二現象学への探求 (フッサール、ハイデガー)	物理的、非物理的なすべての聴覚現象
デュフレンヌ『眼と耳』	耳の正当な評価と複数性の検討	視覚と聴覚の対比的アプローチ (メルロ＝ポンティ)	物理的なすべての音環境
鷺田『聴くことの力』	聴く行為の意味と聴くこととしての哲学の可能性	非方法の方法である試みとしてのエッセイ (メルロ＝ポンティ、レヴィナス)	音声言語のテクスチュア (きめ)
森『〈実践＝教育思想〉の構築』	聞くことの特質からの学びと〈実践＝教育思想〉の構築	他者論を中心とする思想的背景の考察 (レヴィナス)	音声言語を聞く臨場性、即時性

ただし、耳を正当に評価し、視覚と同列に位置づけるという意味では、デュフレンヌは相対主義的に捉えられてしまう懸念がある。それゆえ、聴覚現象を主題的に取り上げつつも、視覚、聴覚を含めた経験の豊かさを取り戻すというアイディの目的の方が、より妥当であると言えるだろう。デリダにとっては、声(記号)はあくまで問いを解明するための例であり、とりわけきくことに関しては副次的なものにとどまっている。鷺田もまた、「聴くこととしての哲学」と記述しているように、聴くことそのものの探求を意図していない。森は、聞くことの特質からの学びに着目した点で教育的意義はあるものの、主眼とするのは実践と教育思想が同時に生起する内実やプロセスである。もちろん、デリダ、鷺田、森ともに、それぞれの問題が解明されていくこともまた、ある意味で経験を豊かにする可能性と結びつくが、その方向性は本研究とは異なるのである。

「アプローチ(言及している現象学者)」の観点については、デリダの脱構築、アイディの近似、鷺田の非方法の方法といったようにそれぞれ独自性が見られるが、ここでは言及している現象学者の射程から包括性について考えたい。アイディによる第一現象学、第二現象学の位置づけからフッサール、ハイデガー以外の各論者を見ると、メルロ＝ポンティは、知覚、身体哲学という意味では第一現象学、実存の哲学という意味では第二現象学に該当するだろ

う。レヴィナスは第二現象学に位置づけられると考える。そのように見ていくと、デリダは第一現象学、アイディは第一現象学と第二現象学、デュフレンヌはメルロ＝ポンティを第一現象学の文脈で捉えている。鷺田はメルロ＝ポンティを第二現象学的に捉えており、レヴィナスも含め第二現象学、森も第二現象学である。こうした射程からすると、アイディがもっとも包括的であると考えられる。

「きく対象の射程」については、もっとも広い範囲を射程としているのはアイディであり、ついでデュフレンヌが続く。したがって、包括性という意味ではアイディが妥当することになる。一方、どの知見においてもきくことが単なる言語的理解にとどまらないことは注目に値する。デリダ自身は音声ロゴス主義を批判する立場ではあるが、フッサールの「孤独な心的生」を出発点とした脱構築の記述は、内言や想像的な声を考察していくための示唆に富んでいる。鷺田や森についても、音声言語が中心的となるものの、きくことのテクスチュアや認識不可能な他者の声をきくという考察には焦点化された深みがある。それらの文献と比較すると、アイディは広い範囲を射程としている分、特定の部分の掘り下げについては十分とは言えない可能性がある。

以上の比較検討から、本研究が志向する包括性に照らし合わせてもっとも妥当であるのは、アイディの知見であることが導き出された。一方で、特定の

範囲の掘り下げについては他の知見にも意義がある。こうした点を踏まえ、きくことの豊かさの包括性と範囲を示すモデルを生成した（図1）。これは、「知覚的文脈／コミュニケーション的文脈」「実在的な音、声／非実在的な音、声」「言語的／非言語的」の3軸による8象限で構成されている3次元モデルである。ここに、全体を包括する知見としてアイディを位置づけた。それにつぐデュフレンヌは、実

在的な音、声に関する上部の4象限に位置する。そして、部分的な知見として「コミュニケーション的、非実在的、言語的」の象限にデリダを、「コミュニケーション的、実在的、非言語的」の象限に鷺田を、「コミュニケーション的、実在的、言語的」の象限に森をそれぞれ定位した。この見取り図は、きくことの現象について考察する際に、どの知見と照らし合わせていけばよいのかという指針となるだろう。

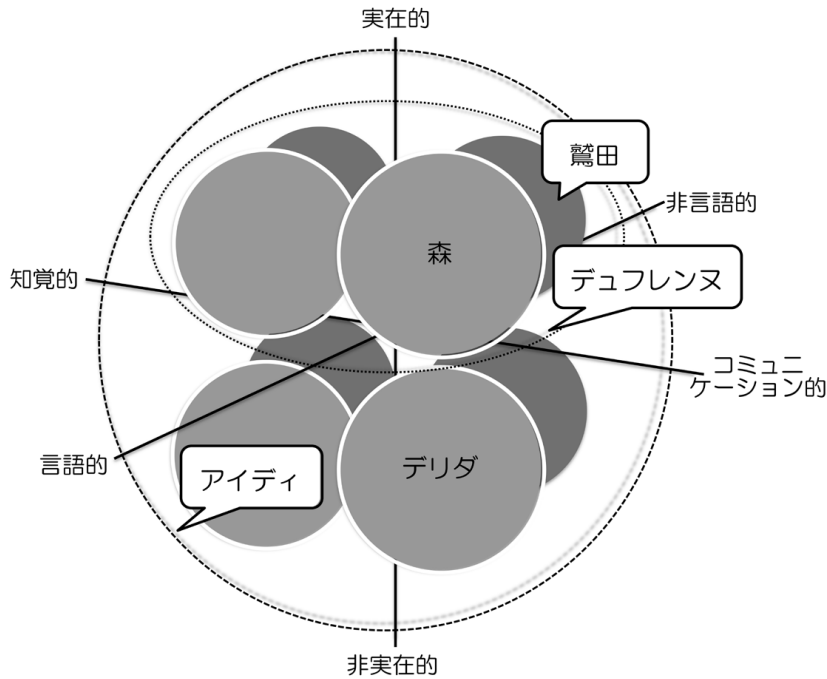


図1 きくことの現象学的知見における比較と位置づけの構造モデル

IV 教育をめぐるきくことの豊かさへ

最後に、アイディの包括的な現象学的知見が、教育をめぐるきくことの豊かさへつながる可能性について展望を示したい。アイディは1934年生まれのアメリカの哲学者であり、今まで20冊を越える著作を世に送り出している。国内での教育研究において主題的に取り上げられたのは福田（2008）、神林（2017、2018a）などにとどまり、まだほとんど援用されることがないため、これからの研究の広がりが期待される場所である。

アイディの特筆すべき点は、「ポスト現象学」を提唱しているところにあると考える。アイディはポスト現象学について、それ以前には「非基礎づけ主義的現象学」と銘打っており、実質的には「プラグマティズム的現象学」と述べている（ア

イディ, 2016, p.106)。これは、「事象そのものへ」をテーゼとする現象学の理念をいっそう踏襲するものだと考えられる。また、教育哲学者デューイとフッサールの異同について検討し、「後期フッサールにおける生活世界への移行と、デューイのプラグマティズムに付着する自然化が、現代的な方向によって非還元的な自然主義へ向けて改善されるということの示唆」（p.100）とのなかに、現象学とプラグマティズムの収束点を見いだしている。そうした意味で、現象学のプラグマティックな性質を前面に打ち出した「ポスト現象学」は、デューイとの親和性も含め、教育研究に有益な知見をもたらす可能性がある。

アイディの『聴くことと声』は、「ポスト現象学」が提唱されるよりも以前の著作ではあるが、その記述には事象そのものから探求するプラグマティック

な側面が見受けられる。今後の展望として、具体的な教育事象を出発点に、アイディをはじめとする本研究で対象とした知見を照らし合わせながら、きくことの豊かさについて考察を深めていきたい。

引用文献

- デリダ, J. 2005 『声と現象：フッサールの現象学における記号の問題入門』(林好雄 訳) 筑摩書房. (原著1967)
- デュフレンヌ, M. 1995 『眼と耳：見えるものと聞こえるものの現象学』(棧優 訳) みすず書房. (原著1991)
- 福田学2008「教育研究における現象学的聴覚論の意義：イーデ『聞くことと声』に定位して」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第48巻, pp.277-286.
- 久野弘幸2014「比較的アプローチ」日本教育方法学会編『教育方法学研究ハンドブック』学文社, pp.86-89.
- フッサール, E. 1975 『経験と判断』ラントグレーベ, L. 編 (長谷川宏 訳) 河出書房新社.
- Ihde, D. 2007 *Listening and Voice: Phenomenologies of Sound* (2nd ed.), State University of New York Press. (1976, 1st ed.)
- Ihde, D. 2016 *Husserl's Missing Technologies*, Fordham University Press.
- 神林哲平2017「『きく』ことの豊かさに関する一考察：子どもと現象学する授業実践を通して」『学ぶと教えるの現象学研究』第17号, pp.23-34.
- 神林哲平2018a「J=ダルクローズにおける『きく』ことの諸様相の現象学的探究：アイディ『聴くことと声：音の諸現象学』を手がかりに」『ダルクローズ音楽教育研究』第42号, pp.1-13.
- 神林哲平2018b「きくことの現象学的探究モデル」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊』26-1号, pp.51-62.
- 森美智代2011『〈実践=教育思想〉の構築：「話すこと・聞くこと」教育の現象学』溪水社.
- 鷺田清一2015『「聴く」ことの力：臨床哲学試論』筑摩書房. (TBSブリタニカ版1999)